

## 学校生活における異年齢集団活動が自己有用感へあたえる影響

信夫 辰規\*・山本 奨\*\*・大谷 哲弘\*\*・佐藤 進\*\*\*

(2018年2月7日受付)

(2018年2月14日受理)

Tatsunori SHINOBU, Susumu YAMAMOTO, Tetsuhiro OTANI, Susumu SATO

### The Effect of Different Age Group Activities in School Life on Self-utility

文部科学省(2011)は、児童生徒の社会性の基礎が低下していることを問題とし、解決策として異年齢交流活動の推進をあげている。この活動が、対人関係スキルを高め社会性の涵養に有効であり、「自己有用感」の獲得に繋がると述べている。本研究では「自己有用感」の定義を「自己の存在が周囲から認められている、必要とされていると受け止める感覚」とし、学校生活における異年齢集団活動である行事について、様々な行事が「自己有用感」の獲得にどのように影響しているのか調べた。行事ごとに異年齢集団活動の意識が異なること、自己有用感の獲得には異年齢集団活動意識だけではなく、同年齢集団活動意識も影響していることが明らかになった。よって、「自己有用感」を獲得するためには異年齢同年齢関係なく、他者とのかわりにおいて、自己が認められる場面を意図的に設けることが重要であることが示唆された。

キーワード：自己有用感、異年齢集団活動、行事、中学生

#### 問題と目的

文部科学省(2011)は、児童生徒の「社会性」をめぐる問題は深刻な課題であるとし、社会性の基礎となる部分、「人と関わりたい」という意欲の低下が問題だとしている。その効果的な解決策として「異年齢の交流活動の推進」によって「自己有用感」を育むことであり、社会性の基礎となる「自己有用感」を獲得することが「自尊感情」の獲得につながり、いじめの未然防止にもつながると述べている。

自尊感情については、文部科学省(2015)では、「自分に対する自己評価が中心」とし、それに對

して自己有用感を「自分に対する他者からの評価が中心」としている。その背景には、他者の存在を前提としない自己評価は社会性に結びつくとは限らないとし、自己有用感に裏付けられた自尊感情が大切だと考えている。ここでいう自尊感情については、文部科学省(2015)は、一般的には「自己肯定感」、「自己存在感」、「自己効力感」の語などとほぼ同じ意味合いで用いられるようだと述べている。

これまで、自己に関する肯定的な概念については、様々な定義が述べられているが自己有用感の定義については、北島(1999)は「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるか

\* 岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻、盛岡市立上田中学校、\*\* 岩手大学大学院教育学研究科、\*\*\* 盛岡市立上田中学校

ということを自分自身で認識すること」, 堤・小泉 (2008) は「自分は周りに対して働きかけ, よりよく変えていくことのできる価値のある存在であるという自信」, 滝 (2009) は「他者との関係の中で自分の存在を価値あるものと受け止められる感覚」とした。また, 出之口 (2010) は「自己の存在を価値あるものと受けとめる感覚」, 松野 (2011) は「集団の中で周囲から受け入れられている感覚。集団の中で自分に自信をもち, 自分が大切だと思える感覚」とそれぞれ述べている。

自己有用感について, 様々な定義付けがされているものの具体的に自己有用感を量的に表す研究については, 堤・小泉 (2008) による, 「小学生版自己有用感尺度」があげられるが, 対象が小学生であること, 自己有用感の定義を「学校で児童に身につけて欲しいと願うこと」に焦点をあてた研究であり, 文部科学省 (2015) のいう「自分に対する他者からの評価が中心」とは異なる。また異年齢集団活動と自己有用感の関係については研究されていない。

文部科学省 (2011) は, 社会性の基礎となる自己有用感を高めるためには, 異年齢集団活動を行うことが対人関係スキルを高め社会性の涵養に有効であるとし, 自尊感情の獲得といじめの予防につながると述べている。これまで, 地域や家庭で獲得されてきたはずの社会性の基礎の部分が十分に育ってこない児童生徒に対して, 学校教育の中で社会性を育むために異年齢集団活動が効果的であり, 実践についても報告されている。しかし, 自己有用感の獲得に異年齢集団活動がどのように効果があるのかまでは述べられていない。

これまでの先行研究等での, 様々な自己有用感の定義付けと文部科学省が述べている「自分に対する他者からの評価」に共通することは, 自己の存在が価値あるものと感じることであると言える。よって, 本研究では自己有用感の定義を「自己の存在が周囲から認められている, 必要とされていると受け止める感覚」とする。ここで言う「自己の存在」とは, 異年齢集団活動における「自己の役割」として操作的に捉えることとする。

以上のことから, 本研究の目的は異年齢集団活動が「自己有用感」の獲得にどのように影響しているのかを明らかにする。そのために, 中学生を対象に学校生活において自己の役割を認められていると感じる項目を収集し, 自己有用感を量的に測るため「自己有用感尺度」を作成する。次に, 学校生活における異年齢集団活動が行われる場面がある「行事」について, 様々な行事活動が「自己有用感」の獲得に影響しているか, 作成した尺度を用いて行事ごとに測定し明らかにする。また, 異年齢集団活動の意識について行事によってどのように捉えているのか明らかにし, 異年齢集団活動意識が「自己有用感」の獲得に影響しているのかを明らかにする。それにより, 明らかになった知見は, 行事活動と自己有用感の関連性の一知見として, 学校生活における「自己有用感」の獲得および, 社会性の涵養の一助になるのではないだろうか。

## 研究 1 - 予備調査

**目的** 自己有用感暫定尺度の作成。

**調査対象者** 公立中学校の教師18名, 中学2年生男子18名, 女子16名

(生徒がイメージしているもの(周囲の反応は, 自分のどのような行動や態度からきているのか)を言語化する参考のため, 教師からも項目を収集した)。

**調査時期** 2017年2月に実施。

**調査手続き**

中学生が学校生活において, どのような時に「自分が周囲から認められている, 必要とされている」と感じているのか, 学校生活において生徒の主な活動場面と考えられる, 行事, 学級活動, 部活動について, 教師と生徒を対象に自由記述によって回答を得る。

倫理的配慮については, 自由記述による質問紙は無記名式で行い, 調査対象者の回答の匿名性が確保されるようにした。得られたデータは, 調査

以外の目的で使用しないことを紙面に明記した。

### 調査内容

事前に、質問内容について妥当か教職大学院生3名（教職経験のある現職院生）、調査対象の公立中学校の教師3名から意見を聞いた。

それをもとに質問内容については以下とした。教師に対しては「体育祭や文化祭の活動の中で、生徒の活動のどんなところを認め（褒め）ますか」、「生徒会活動（委員会活動など）の中で、生徒の活動のどんなところを認め（褒め）ますか」、「学校生活（係活動、部活動など）の中で、生徒の活動のどんなところを認め（褒め）ますか」の3質問。生徒に対しては「体育祭や文化祭」、「学級の活動」、「部活動」の場面について、それぞれ「（場面）の中で、がんばったと感じる時は、どんな時ですか」、「（場面）の中で、感謝した時は、どんな時ですか」、「（場面）の中で、感謝されたと感じる時は、どんな時ですか」の3項目からなる9質問について、自由記述で回答を求めた。

### 結果と考察

自由記述の回答を整理したところ、教師からは180項目、生徒からは284項目が収集された。この収集項目について、教師と生徒ごとに分け、さらに学校行事、学級活動、部活動と場面ごと分類した。項目の分類については、KJ法を参考にして、教職経験のある教職大学院生3名に協力を得て検討を行った。

その結果、教師は生徒が自分の役割（リーダーの役割や仕事の責任）に関することについて、教師の意図した行動が出来たときに認め（褒め）ている内容に分類された。生徒の回答からは、自分の役割や仕事に対する満足感や周囲の反応等について答える内容について分類された。これは、教師は生徒の具体的な行動や態度が自分の意図している事か確認して、認め（褒め）ていることに対して、生徒は自分の行った事が、周囲からの反応（誰かに認めらるること）により、認知していることがこの結果から推察される。この分類した項目について、「責任」、「人間関係」、「共有」、「達成感」、「勤労・奉仕」、「感謝」、「支援」の7つのカテゴリー

に整理した。カテゴリー整理にあたっては、生徒がイメージしているものを言語化するため教師の回答を参考にし、生徒の回答の表現を修正した。

このことから、生徒が「自分が周囲から認められている、必要とされている」と感じるためには、自分に役割あること、役割に対する責任、達成感、周囲との関係性（「リーダー」であるか「フォロワー」であるか）、その役割について感謝あるいは支援されたかを感じる必要があることが推察される。

よって、7つのカテゴリーに整理した項目について、本研究における自己有用感の定義をもとに再考し、行事における活動において「周りから認められる・周りから認められた」に該当しない項目を削除し、44項目からなる暫定尺度を作成した。

## 研究1—本調査

**目的** 予備調査で作成した暫定尺度の因子構造を検討し、「自己有用感尺度」を作成する。

**調査対象者** 予備調査と同じ、公立中学校の1年生から3年生男女404名。

**実施時期** 2017年4月に実施。

### 調査手続き

（1）依頼と回答者の選定・回収：学校長あてに調査依頼を送付し、1年生から3年生までの通常学級に通う全生徒を対象に、新年度、最初の学校行事である、1年生の学年オリエンテーション、2年生の宿泊研修、3年生の修学旅行の終了後に、質問紙による調査を依頼した。行事終了後に各学級で担任が生徒に配布し回収した。

担任には、行事の活動とは、準備から本番までの活動であることを説明した。なお、予備調査時と同様の倫理的配慮を行った。

### 調査材料

以下の内容によって構成される46項目からなる質問紙。

（1）予備調査で作成した44項目からなる暫定尺度を使用し、「とてもそう思う」から「まったくそ

う思わない」までの5件法で回答を求めた。

(2) 異年齢集団活動：行事にかかわる準備や本番での係活動について、「他学年とどのくらい交流があったか」「同級生とどのくらい交流があったか」の2項目について「とてもある」から「全くない」までの10件法で回答を求めた。

### 結果と考察

調査の結果、回答を得られたのは、総生徒数404名中、385名であった。調査に使用した、46項目のうち、異年齢集団活動か同学年集団活動を問う2項目を除く、44項目で因子構造を検討するため因子分析を行った。事前に、各項目の平均値、標準偏差をチェックし天井効果がみられた16項目を削除し、28項目で因子分析（最尤法）を行った。結果について、初期の固有値は順に14.26, 1.75, 1.42であり第3因子までの回転前の累積寄与率は62.26%であった。自己の存在が周囲から認められている、必要とされていると受け止める感覚に関して、リーダーとフォロワーの関係や生徒同士の相互の関係が重要であるととらえ、3因子を抽出した。

第1因子では、「周りに指示を出している」、「周りから推薦される」などの項目に高い負荷量が見られた。これらは、自分が周りに影響をあたえていると感じていることを示していると考えられた。そこで、『リーダー意識』と命名した。第2因子では、「周りはアドバイスをしてくれる」、「周りは相談のつてくれる」などの項目に高い負荷量が見られた。これらは、周りから援助を受けている、援助をしていると感じていることを示していると考えられた。そこで、『相互援助意識』と命名した。第3因子では、「周りのために活動する」、「進んで活動の準備をしている」などの項目に高い負荷量が見られた。これらは、周りへの貢献している意識や、自分の行動が周りの役に立っていると感じていることを示していると考えられた。そこで、『貢献意識』と命名した。

負荷量が低いものや複数の因子に負荷量を示す項目は削除し、各因子の項目数をそろえ15項目とした。プロマックス回転後の因子パターンをTable 1に示した。

| 項目   | 因子     |        |        |      |
|--|--------|--------|--------|------|
|  | No.1   | No.2   | No.3   |      |
| <b>リーダー意識 (<math>\alpha = .866</math>)</b> |        |        |        |      |
| 20 周りに指示を出している                             | .790   | -.051  | .086   |      |
| 10 周りから推薦される                               | .753   | .164   | -.124  |      |
| 5 集団をまとめることができる                            | .746   | -.099  | .147   |      |
| 3 周りから頼られている                               | .740   | .123   | -.050  |      |
| 35 私がいないと仕事が進まない                           | .544   | .005   | .088   |      |
| <b>相互援助意識 (<math>\alpha = .879</math>)</b> |        |        |        |      |
| 32 周りはアドバイスをしてくれる                          | -.017  | .855   | -.075  |      |
| 37 周りは相談のつてくれる                             | -.080  | .843   | .061   |      |
| 41 周りはアドバイスを聞いてくれる                         | .091   | .735   | -.047  |      |
| 29 周りは相談してくれる                              | .092   | .637   | .136   |      |
| 26 周りから応援された                               | .156   | .447   | .212   |      |
| <b>貢献意識 (<math>\alpha = .883</math>)</b>   |        |        |        |      |
| 40 周りのために活動する                              | -.129  | .064   | .915   |      |
| 39 進んで活動の準備をしている                           | -.070  | .146   | .804   |      |
| 1 進んで活動の片付けをしている                           | .246   | -.177  | .640   |      |
| 14 周りに認められようと努力している                        | .177   | -.006  | .632   |      |
| 13 周りに協力している                               | .100   | .046   | .621   |      |
| プロマックス回転後の                                 | リーダー意識 | —      | .619   | .692 |
| 因子間相関(右)と                                  | 相互援助意識 | .621** | —      | .661 |
| 下位尺度間の相関(左)                                | 貢献意識   | .695** | .664** | —    |

<sup>†</sup>  $p < .10$  <sup>\*</sup>  $p < .05$  <sup>\*\*</sup>  $p < .01$

Table 1 自己有用感暫定尺度の因子分析の結果と下位尺度構成因子

自己有用感尺度の内的整合性を確認するため、各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、どの因子も.80超と高い値を示した。また、因子相関については、それぞれ.60を超える比較的高い値を示した。

#### 中学生版「自己有用感尺度」について

中学生が学校生活において、自己の役割を認められていると感じるには、リーダーとしての役割、相互に援助しあうこと、周囲のために活動することの3つが考えられた。それは、自分に対しての他者からの評価を感じるためには、自分の役割を自覚すること、他者と活動する（関わる）場面があることが重要であることが考えられる。それぞれの相関は高い傾向にあったが、学校生活場面ではリーダーとなる生徒、フォロワーとなる生徒がいること、また、お互いが助け合うことを前提とした指導がなされ、学校生活を送っている事などが影響しているものと思われる。

堤・小泉（2008）による、「小学生版自己有用感尺度」では「対人因子」、「対学習因子」、「適切な自己表現因子」と3因子が抽出されているが、「学習場面」、「対人関係を中心とした生活場面」、「自己を表現する場面」と場面ごとの自己有用感についての尺度であり、本研究での異年齢集団活動場面における自己有用感とは異なる。しかし、「対人因子」については、自己有用感が他者との関わりから獲得することを前提として考えれば、本研究と同じものが抽出されているといえる。本研究では、異年齢集団活動での自己有用感であることから、本調査で得られた15項目からなる尺度を「自己有用感尺度」とし、今後の調査に用いることとする。

## 研究2

**目的** 研究1で作成した「自己有用感尺度」を用いて、全校生徒が関わる行事が自己有用感の獲得に影響しているのか明らかにする。また、行事ごとの異年齢集団活動意識についての特徴を示し、

異年齢集団活動意識が自己有用感の獲得に影響しているのかを明らかにする。

**調査対象者** 予備調査と同じ、公立中学校の1年生から3年生の男女385名。

**実施時期** 2017年4月から11月に行われた8つの行事、①学年行事、②体育祭、③写生会、④中学校総合体育大会（以下では中総体とする）、⑤合唱交友運動（以下では交友運動とする）、⑥市内陸上大会（以下では市内陸上とする）、⑦文化祭、⑧生徒会引継式（以下では引継式とする）の終了後。

#### 調査手続き

（1）依頼と回答者の選定・回収：学校長あてに調査依頼を送付し、1年生から3年生までの通常学級に通う全生徒を対象に、4月から11月までの全校生徒が関わる行事に対して、質問紙による調査を依頼した。行事終了後に各学級で担任が生徒に配布し回収した。

担任には、行事の活動とは、準備から本番までの活動であることを説明した。なお、予備調査時と同様の倫理的配慮を行った。

#### 調査材料

以下の内容によって構成される17項目からなる質問紙。

（1）自己有用感：予備調査で得られた、自己有用感尺度15項目について「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。

（2）異年齢集団活動：行事にかかわる準備や本番での係活動について、「他学年とどのくらい交流があったか」、「同級生とどのくらい交流があったか」の2項目について「とてもある」から「全くない」までの10件法で回答を求めた。

#### 結果と考察

4月から11月までに行われた全校生徒が関わる8つの行事、①学年行事（4月に学年ごとに行われる、集団の役割と他とのコミュニケーションを主な目的とした3年生の修学旅行、2年生の宿泊研修、1年生の学年オリエンテーション）、②体育祭（1年生から3年生までを縦割りし、組団を

作り3年生をリーダーとして行う異年齢の交流とリーダー意識を育むことを目的とした体育的行事), ③写生会(郊外の同じ場所で全校生徒が絵を描く個人での活動が主な行事), ④中総体(中学生における運動部の大会, 3年生にとっては最後の大会), ⑤交友運動(合唱練習を縦割りで行うことにより, リーダーの育成と合唱文化の継承を目的とした行事), ⑥市内陸上(選手を全校で応援する全校参加の陸上大会), ⑦文化祭(生徒会展示, 合唱コンクール, 作品展示と異年齢集団, 同年齢集団, 個人の活動が混在する行事), ⑧引継式(全校の前で前期生徒会から後期生徒会へ, 前期生徒会の活動反省と後期生徒会の決意を発表する行事)について, 各行事が終わった数日後(1日~3日の間)に自己有用感尺度を用いた質問紙で回答を得た。調査の対象としたのは, 8回の行事全てで回答を得られた340名。この340名について分析を行った(研究1で回答を得られた, 1年生から3年生の男女385名中88%にあたる人数であった)。

#### 行事ごとの自己有用感についての検討

下位尺度ごと(第1因子『リーダー意識』, 第

2因子『相互援助意識』, 第3因子『貢献意識』)に, 各学年(1年生102名, 2年生134名, 3年生104名)の下位尺度得点について, 学年と行事を要因とする $3 \times 8$ の2要因分散分析を行った(平均と標準偏差をTable 2に示す)。分析の結果, 『リーダー意識』においては, 行事の主効果で有意であり( $F(7, 2359) = 7.44, p < .01, \eta^2 = 0.0216$ )多重比較の結果⑦文化祭が, ⑤交友運動, ⑧引継式以外の行事より高いことが示された(誤差の平均平方(以下ではMSeとする) = 6.62,  $p < .05$ )。『相互援助意識』においても, 行事の主効果で有意であり( $F(7, 2359) = 3.93, p < .01, \eta^2 = 0.0115$ )多重比較の結果⑥市内陸上, ①学年行事, ④中総体, ⑦文化祭より低かった(MSe = 7.66,  $p < .05$ )。『貢献意識』においては, 交互作用が有意であった( $F(14, 2359) = 2.72, p < .01, \eta^2 = 0.0159$ )。そこで, 水準ごとの単純主効果を検定した。④中総体においては, 学年の要因が有意で, 1年生が他の学年よりも高かった(MSe = 14.71,  $p < .05$ )。

この結果から, 『リーダー意識』に関しては, 文化祭における主な活動が合唱コンクールに向け

| リーダー意識      |      | ①学年行事 | ②体育祭  | ③写生会  | ④中総体  | ⑤交友運動 | ⑥市内陸上 | ⑦文化祭  | ⑧引継式  |
|-------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1年生 (n=102) | 平均値  | 14.50 | 14.63 | 15.03 | 14.52 | 15.32 | 14.48 | 15.45 | 15.32 |
|             | 標準偏差 | 4.20  | 4.45  | 4.33  | 4.42  | 4.48  | 4.57  | 4.33  | 4.75  |
| 2年生 (n=134) | 平均値  | 14.02 | 14.50 | 14.85 | 14.81 | 15.13 | 14.90 | 15.69 | 15.12 |
|             | 標準偏差 | 4.05  | 4.30  | 4.15  | 4.16  | 4.39  | 4.52  | 4.72  | 4.76  |
| 3年生 (n=104) | 平均値  | 15.08 | 15.07 | 15.04 | 15.84 | 15.82 | 14.87 | 15.95 | 14.93 |
|             | 標準偏差 | 4.69  | 4.52  | 4.82  | 4.80  | 4.81  | 4.51  | 4.72  | 4.44  |

| 相互援助意識      |      | ①学年行事 | ②体育祭  | ③写生会  | ④中総体  | ⑤交友運動 | ⑥市内陸上 | ⑦文化祭  | ⑧引継式  |
|-------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1年生 (n=102) | 平均値  | 19.43 | 19.57 | 19.13 | 19.96 | 19.56 | 18.88 | 19.58 | 19.82 |
|             | 標準偏差 | 4.05  | 4.32  | 5.12  | 4.38  | 4.60  | 4.77  | 4.48  | 4.48  |
| 2年生 (n=134) | 平均値  | 19.44 | 19.62 | 19.39 | 19.78 | 19.23 | 18.69 | 19.68 | 19.03 |
|             | 標準偏差 | 3.88  | 4.12  | 4.40  | 4.03  | 4.69  | 4.79  | 4.23  | 4.82  |
| 3年生 (n=104) | 平均値  | 19.60 | 18.87 | 18.62 | 18.67 | 18.52 | 18.49 | 19.37 | 18.17 |
|             | 標準偏差 | 4.22  | 4.72  | 4.42  | 5.10  | 5.01  | 4.89  | 4.40  | 4.50  |

| 貢献意識        |      | ①学年行事 | ②体育祭  | ③写生会  | ④中総体  | ⑤交友運動 | ⑥市内陸上 | ⑦文化祭  | ⑧引継式  |
|-------------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1年生 (n=102) | 平均値  | 20.37 | 20.64 | 20.39 | 21.84 | 20.75 | 20.27 | 21.13 | 20.48 |
|             | 標準偏差 | 3.44  | 3.41  | 4.47  | 3.23  | 3.97  | 4.08  | 3.45  | 4.03  |
| 2年生 (n=134) | 平均値  | 19.16 | 19.91 | 19.98 | 20.25 | 19.41 | 19.40 | 20.26 | 19.56 |
|             | 標準偏差 | 3.89  | 3.64  | 3.80  | 3.76  | 4.39  | 4.33  | 4.39  | 4.42  |
| 3年生 (n=104) | 平均値  | 20.31 | 19.67 | 19.34 | 19.49 | 19.42 | 19.22 | 20.34 | 18.91 |
|             | 標準偏差 | 3.70  | 4.09  | 3.97  | 4.38  | 4.25  | 3.88  | 3.65  | 3.73  |

Table 2 行事における各下位尺度得点の平均値と標準偏差

た練習であり、合唱交友運動と共通している活動であること。また、どの学年も指揮者、伴奏者、パートリーダーなど明確な役割意識を持って活動していることが高くなっている原因の1つと推察できる。『相互援助意識』に関しては、お互いが活動する場面があって成立することと捉えると、市内陸上では、全校で活動すると言っても選手団と応援団にわかれる。また、選手団において陸上競技はほとんどが個人種目であり相互援助の機会が少ないこと、応援団において応援練習が短期間であることから相互援助の機会が少ないことが原因の1つと推察できる。『貢献意識』に関しては、先輩後輩を強く意識する部活動において、3年生最後の大会である中総体への取り組みが、1年生が先輩のため、競技のために貢献しようとする意識を高くしたものと推察できる。

行事活動が「自己有用感」にあたえる影響について

『リーダー意識』は、文化祭で高い値を示した。『貢献意識』は1年生が中総体で高くなることが示された。文化祭が、他の行事と違うところは行事活動全体では、異年齢集団活動が行われる場面はあるが、主となる活動が合唱コンクールに向けた学級ごとの練習であり、学級ごとにリーダーの役割を担う生徒のリーダーシップのもと活動を行っている。3年生以外の学年においてもリーダー意識を持つことが影響していると考えられる。それとは逆に、1年生にとっては、先輩後輩の関係性が強い部活動において全校生徒が関わる中総体は、先輩のために活動しようとする意識が高まるのが影響していると考えられる。

行事ごとの異年齢集団活動意識の検討

それぞれの行事が、「自己有用感」の獲得へどのように影響しているか分析したが、その行事が生徒たちに異年齢集団活動としてどのように意識されているのか、同年齢集団活動としてはどのように意識されているのかを明らかにするために、行事ごとの異年齢集団活動意識、同年齢集団活動意識について標準化得点を算出し、これを比較した。また、そのロケーションを Figure 1 に示し

た。異年齢集団活動意識と同年齢集団活動意識の下位尺度得点について、行事と集団活動意識を要因とする  $8 \times 2$  の2要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった ( $F(7, 2712) = 26.44, p < .01, \eta^2 = 0.0639$ )。そこで、水準ごとの単純主効果を検定した。行事において、異年齢集団活動意識が有意に高かったのは④中総体であり、次に高いのは②体育祭であった。有意に低いのは①学年行事、③写生会であった ( $MSe = 0.8825, * p < .05$ )。同年齢集団活動意識について有意に高いのは、②体育祭、④中総体、⑦文化祭であり、⑧生徒会引継式が有意に低かった ( $MSe = 0.9730, * p < .05$ )。また、異年齢集団活動意識より同年齢集団活動意識が高かった行事は①学年行事、③写生会、⑦文化祭であった ( $MSe = 1.3167, * p < .05$ )。

この結果から、異年齢集団活動意識が高い行事は、同年齢集団活動意識も高いことが示された。中学校の行事において、異年齢集団活動を意識するのは中総体であり、普段の部活動から意識している事が原因の1つと考えられる。また、部活動は同年齢活動の場面も多い(レギュラーが同じ学年である場合や学年ごとに練習に取り組む、準備や後片付けは同学年で行う等)こともあり、必然的に同年齢集団活動意識が高くなるものと考えられる。それに対して、同学年集団活動意識が高くなることが予想される①学年行事、③写生会の同年齢集団活動意識が低い得点を示したのは、新年度が始まって間もない時期の行事であり、集団に対する自分の役割がまだ意識されていないと考えられることや写生会については、全校行事ではあるものの個人の活動が主であり、集団で活動する場面がないことが意識の低さに繋がっていると考えられる。

異年齢集団活動意識が自己有用感にあたえる影響の検討

行事ごとの自己有用感への影響についてと、行事の異年齢集団活動意識、同年齢集団活動意識についての検討を行ったが、異年齢集団活動意識と同年齢集団活動意識が自己有用感の獲得にどのよ

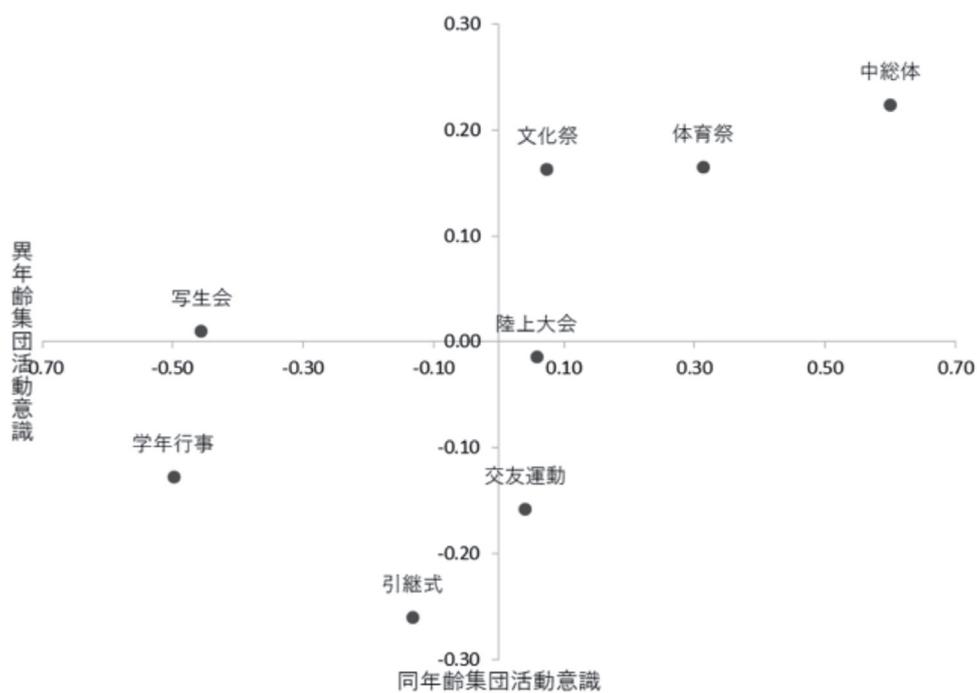


Figure 1 行事における異年齢同年齢集団活動意識の位置

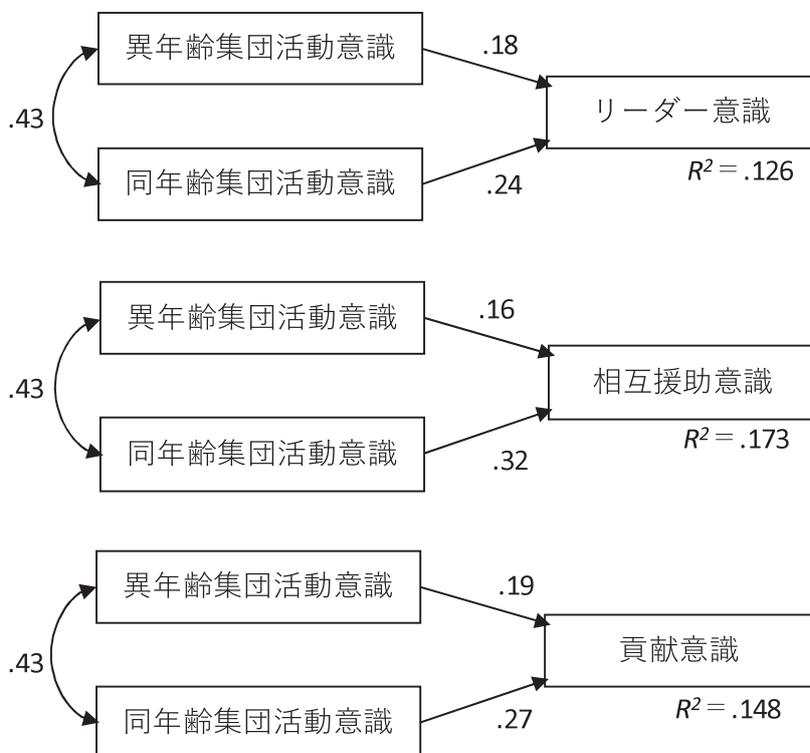


Figure 2 異年齢集団活動意識と同年齢集団活動意識が自己有用感にあたる影響

うに影響しているのかを検討するにあたって、重回帰分析を行った。異年齢集団活動意識と同年齢集団活動意識の相関係数は.425を示した。『リーダー意識』について、 $R^2$ は.126であり0.1%水準で有意であった。標準化係数において異年齢集団活動意識.184、同年齢集団活動意識.235でありすべてが有意な影響をあたえている。『相互援助意識』について、 $R^2$ は.173であり0.1%水準で有意であった。標準化係数において異年齢集団活動意識.158、同年齢集団活動意識.324でありすべてが有意な影響をあたえている。『貢献意識』について、 $R^2$ は.149であり0.1%水準で有意であった。標準化係数において異年齢集団活動意識.189、同年齢集団活動意識.265でありすべてが有意な影響をあたえている。なお、VIF値は3つとも1.22であり、多重共線性については問題ないと言える。

このことから、異年齢集団活動意識と同年齢集団活動意識の両方とも自己有用感の獲得に影響をあたえていることが示された(Figure 2)。つまり、行事活動は異年齢集団活動と同時に同年齢集団活動も意識し活動していることが示唆された。

#### 異年齢集団活動が「自己有用感」にあたえる影響について

今回は、行事を異年齢集団活動ととらえ調査した。行事によって異年齢集団活動意識の違いはあったが、行事活動は少なからず「自己有用感」の獲得に影響をあたえていることが示された。しかし、文部科学省の言う異年齢集団活動が自己有用感の獲得に影響するかについては、調査した行事が同年齢集団活動も意識していることや行事以外の異年齢集団活動について調査していないことから明確には確認できなかった。

#### 総合的な考察

本研究の目的は異年齢集団活動が「自己有用感」の獲得にどのように影響しているのかを明らかにすることであった。

堤・小泉(2008)による、「小学生版自己有用

感尺度」では、「学習場面」、「対人関係を中心とした生活場面」、「自己を表現する場面」と場面ごとの自己有用感についての尺度であったが、本研究では行事を異年齢集団活動と捉え、異年齢集団活動場面(行事ごと)について、自己有用感を測定することを目的とした。

行事ごとに異年齢集団活動の意識が異なることは想定していたが、本研究で調査した行事においては、自己有用感には異年齢集団活動意識だけではなく、同年齢集団活動意識も影響していることが明らかになった。

また、文部科学省(2011)は、異年齢集団活動が効果をあげるポイントについて、①「関わる喜び」が獲得できる活動を設定しているか、②年長者が主体的に取り組める活動になっているか、③全職員が「交流活動」で子供が育つメカニズムを正しく理解し、適切な対応ができる仕組みになっているか、の3つをあげている。社会性を育むことで「自己有用感」の獲得につながることにについては、文部科学省の述べる通りだと考えるが、本研究では「自己有用感」の定義を「自己の存在が周囲から認められている、必要とされていると受け止める感覚」とした。その定義をもとに考えると、行事によって影響する下位尺度が違うことが明らかとなり、行事において「自己有用感」は、異年齢、同年齢集団活動に関係なく、他者との関わりにおいて自己の存在が認められる場面があれば自己有用感の獲得につながることを示唆された。

よって、学校教育では「リーダー意識」の獲得にはどの学年においても、役割と活動内容が明確な行事(文化祭)、「貢献意識」の獲得には異年齢を強く意識させる行事(中総体)が有効であること。また、それぞれの活動において異年齢同年齢関係なく、他者とのかわりにおいて、自己が認められる場面を意図的に設けることが重要であるといえよう。

## 本研究の課題

本研究では、「自己有用感」を「自己の存在が周囲から認められている、必要とされていると受け止める感覚」と定義し、その構造を明らかにした。また、行事を学校生活における異年齢集団活動と捉え、行事ごとの自己有用感の獲得への影響の違いや異年齢集団活動意識の違い、さらに異年齢集団活動意識が自己有用感の獲得にどのように影響するのかを明らかにした。

特に、どの行事も異年齢集団活動だけではなく、同年齢集団活動も意識していることに注目したい。各行事では、異年齢と活動する場面はあるがほとんどの活動時間は同年齢と活動していることと意識していることが、知見として示されたといえる。今後は、異年齢集団活動の意識について教師が意図的に生徒に指示しているのか、十分に考慮して調査を行う必要がある。

最後に本研究の課題として、第1に尺度作成において再検査法を行い尺度の安定性を確認することである。それにより、より正確な結果が得られたのではないかと考える。第2に、各行事の調査について、行事が終了して1日以上経過してから行ったことである。行事の最中や直後であれば、行事の内容等をより強く意識して行事そのものの自己有用感についての結果が得られたのではないだろうか。第3に、異年齢集団活動のとらえである。今回は、行事における「自己有用感」の調査であったが、今後、自己有用感の獲得については、行事だけではなく普段の学校生活場面（係活動や生徒会活動、部活動など）での調査や教師が活動をどう意識させたのかの調査が必要である。また文部科学省（2011）が述べる、異年齢集団活動の効果をあげるポイントとどう関連性があるのか検討が必要である。第4に、個人の役割と自己有用感との関わりについてである。個人によって、行事で自己有用感が高い、低いがあり、特徴的な生徒（常に高い、あるいは低い）についてインタビュー調査等を行い、個別の事例を取り上げた検討が必要である。

## 〈引用文献〉

- 出之口昭子（2010）.「児童一人一人の自己肯定感と自己有用感を高める生徒指導の研究」 鹿児島県総合教育センター 長期研修報告書
- 猪股歳生（2011）.「異年齢集団における人間関係づくりの研究－自己・他者理解を深め、自己肯定感を高めるプログラムの実践を通して－」 青森県総合学校教育センター 研究紀要
- 石本雄真（2010）.「青年期の居場所感が心理的適応、学校適応に与える影響」 発達心理学研究, 21（3）, 278-286.
- 北島貞一（1999）.「自己有用感－生きる力の中核－」 田研出版
- 松野広（2011）.「自己有用感を高め、主体的に学習に取り組む態度を醸成するための一試み」 宮城県総合教育センター 専門研究・長期研修 B・C 研究成果報告書
- 文部科学省（2006）. 子どもの意欲・やる気等の向上・低下に係る調査研究成果・事例の収集調査 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo\\_5/gijiroku/06031401/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_5/gijiroku/06031401/003.htm)>
- 文部科学省（2010）.『生徒指導提要』
- 文部科学省 国立教育政策研究所（2011）. 生徒指導支援資料3 「いじめを減らす」 <<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2306sien/index.htm>>
- 文部科学省 国立教育政策研究所（2012）. 生徒指導リーフ Leaf 9 いじめの未然防止 II <<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>>
- 文部科学省 国立教育政策研究所（2015）. 生徒指導リーフ Leaf18「自尊感情」?それとも、「自己有用感」? <<http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>>
- 滝充（2009）.「ピアサポートではじめる学校づくり 小学校編」 金子書房
- 堤さゆり・小泉令三（2008）.「小学生版自己有用感尺度作成の試み」 教心第50回総会